

思い出の中のシオン寮

— 女子大学の教育寮での二年間 —

加納 孝代

<要旨>

青山学院女子短期大学の学生寮「シオン寮」は学生の人格の教育とキリスト的生活環境の提供をその目的として1951年に設置された。本稿では開寮後50年以上が経過し、卒寮生の数も8,000名を越すこの寮が果たして当初の目的を実現してきたか否かを、卒寮生の各世代から数名ずつ、計66名に依頼して得られた文章の分析にもとづいて検証した。卒寮後数年ないし数十年が経過した現在も多く卒寮生は寮における最も重要な体験として、尊敬できる寮監や一生持続する強い絆で結ばれた友人に出会ったこと、規則や定められた日課に基づく生活の中で自制心が育ったこと、キリスト教的な環境の中で自分の生き方の基準が築かれていったことを挙げた。これらは所期の目的に十分に沿ったものであり、今後とも明確な目的意識と確固とした方針で寮運営に臨めば、学生寮は人格教育およびキリスト教教育の場として十分に機能し得ることを示唆している。

キーワード：女子大学寮，教育寮，寮生活，寮の記憶

Keyword: women's college dormitory, educational dormitory, dormitory life, dormitory in memory

1. シオン寮の略史と本研究の意義

学生が女子短期大学生生活の2年間を寮で過ごすということの教育的意義について明らかにするのが本稿の目的である。結論はある程度一般化された形で提示できると考えているが、材料として用いるのは青山学院女子短期大学が設置している「シオン寮」という学寮で生活した同窓生の書いた文章である。方法は統計的、定量的なものではなく、ある程度の人数を代表する意見と思われるものを選び、それをテキストとして評釈する「エクスプリカシオン・ド・テキスト」、すなわち文章から書き手の意識を汲み取る、文学作品研究で用いる手法に拠った。寮生活を送っている学生の現時点での意識を調査した研究報告は本年報にも二編掲載されているが、それらに対比される本稿の特徴は、ある程度の年月が経った後の時点における意識に着目した点にある。

青山学院女子短期大学の開学は1950(昭和25)年4月、シオン寮開寮はその1年後の1951年5月であった。寮の性格は、当時の青山学院女子短期大学学則56条の文言「本学の寄宿寮は人格完成教育のために重要な役割を果たしている。学生は希望に従って文化施設をもつキリス

ト教的高い生活環境の中で心身の修養と団体生活の訓練を受けることができる」に表明されているように、人格完成を目的とする教育寮であった。この学則にはまたキリスト教的な生活環境を提供するということも明言されていた¹⁾。

シオン寮は1951(昭和26)年に「シオン第一寮」(定員69名)、1954(昭和29)年に「シオン第二寮」(定員39名)という順序で当時の渋谷区金王町(現在渋谷区渋谷2丁目。第一勧銀事務センターのあるあたり)に二つの木造の建物が建てられた。短期大学発足からシオン第一寮開設までには1年1か月の間隔があり、この期間を地方出身の青山学院女子短大の第一期生たちはつぎのような三種類のかたちで過ごした。一部はすでにシオン第一寮の寮監になることに内定していた川尻知恵とともに東洋英和女学院の青楓寮に「間借り」をする、二つめのグループは「家庭寮」とよぶ卒業生(青山学院女子短期大学の前身である青山女学院)の自宅に受け入れてもらう、そして残りは東京の知人・親戚宅に寄宿させてもらうというものである。こうした「前史」を経ての寮開設であったため、最初に入寮した学生たちの感激はひとしおであった。

金王町のシオン寮は15年後の1966(昭和41)年に渋谷区猿楽町(現在の寮の場所)に移転した。理由は二つあった。一つは渋谷駅周辺の繁華街化に伴ってその地域に隣接する金王町の実環境の悪化が懸念されたこと、二つは青山学院大学理工学部建設資金捻出のために金王町の土地を売却する必要が生じたことである²⁾。こうしてシオン第一寮とシオン第二寮は統合され、東横線代官山に近い現在地に6階建て鉄筋コンクリートの建物が新築された。新しいシオン寮の部屋は洋室で、それまでの畳、押入れ、座り机に代わって、ベッド、クロゼット、机、椅子の生活となり、二段ベッドを入れて一室に4人、定員248名の寮が誕生した。その後建物は今日まで現存し、寮として用いられている。しかし定員は猿楽町移転後22年目の1987(昭和62)年に半数の124名に縮小され(その前年は過渡的に180名)、一室4名であったのが一室2名となった。現在青山学院女子短期大学の学生数は専攻科生も含めると約2,200名であるから、その中のシオン寮生の割合はおおよそ5パーセント、つまり20人に1人という率になる。

猿楽町への統合移転後のシオン寮は「大世帯」となり、年を追う毎に「卒業」していく学生数も増大していった。その流れの中で青山学院女子短期大学開学30周年にあたる1980(昭和55)年、有志によって卒業生の集まり「シオン寮の会同窓会」が発足した。この略称「シオン寮の会」は2年に一度総会を開き、同じ周期で「シオン寮だより」というニューズレターを発行している。シオン寮卒業生の数は2002年現在で3,000人を超えている。

本研究の目的はさきに記したように、大学が学寮を設置したときに込めていた教育的意図が実際にはどのように実現されたかを、体験の時点から一定の時間が経ったあとの寮生(正確には「元寮生」であるが、本稿では考察の対象の「寮生」とはすべて「元寮生」であるので、とくに断わらない場合、「寮生」といえば「元寮生」の意味である)の意識の次元で明らかにしようというものである。開寮からすでに50年が過ぎているため、寮生にもそれだけの年齢の幅がある。本研究ではどの世代もできるだけまんべんなくカバーしようとしてみた。調査はまず「懇談会」という場を設けて、その場で自由発言を依頼し、次にその内容を文章化してもらうという方法をとった。この調査への協力の呼びかけは猿楽町に移転したあとのシオン寮の寮監を1985(昭

和60)年から1997(平成9)年まで12年間務めた平田絢子氏にもらった³⁾。こうして5回の懇談会を持ち、合計約70名の出席を得た。懇談会には来られなかったが文章を寄せた人もあった。こうして「元寮生」が彼らの寮時代の日々を振り返った上で、現時点での寮に対する思いを述べた66編、A4版にして約70ページの分量の文章を得ることができた。これは公表出版されたものではないが、本稿では「シオン寮卒寮生文集」として随時引用する⁴⁾。シオン寮がどんなに素晴らしい場所であったか、と今でも思い続けている人だけに出席を要請したわけではない。しかし「あなたの学生時代の寮での生活を今から振り返ってみるとどのように総括しますか」というような呼びかけで懇談会へと招き、また文章を書いてもらったのであるから結果的には寮生活のもつ積極的な意義について語りたい寮生が多く集まったことは否めない。その意味ではこれがいわゆる「客観的」調査でないことはもとより承知している。にもかかわらず、そういった人々の現時点における意識を明らかにすることは、教育機関が自己の教育のある程度長い年月にわたる効果を省みる際にきわめて重要であるとの判断によって、この研究はおこなわれた。

懇談会や文章の中で元寮生がとりあげた話題は多岐にわたったが、およそつぎの五つに収斂した。それらは(1)寮監について、(2)友人について、(3)集団生活一般について、(4)寮の規則について、(5)キリスト教について、である。このうち(3)はしばしば(2)や(4)と関連するので、本稿では独立した項目としては扱わなかった。以下にはそれを除く四つの項目について、元寮生の感想を分析しつつ、紹介していくことにする。

2. 寮監について

寮において寮監の果たす役割はどのようなものであろうか。多くの寮生が自分が在寮した当時の寮監について語っている⁵⁾。なかでもシオン第一寮の寮監であった川尻知恵(1900-1978)に関するものが群を抜いて多い⁶⁾。キリスト教信仰をもって明治・大正・昭和の三つの時代を真摯に生きたこの女性がいかに傑出した人物であり、その感化力がいかに大きかったかということは、川尻の没後に編まれた『川尻知恵先生追悼文集』によっても知られるが、シオン寮の歴史にとっても川尻知恵という初代寮監を得たことは幸いであった。

寮生がシオン第一寮で接した川尻はすでに50歳を過ぎていた。寮生はいつもきちんとした和服姿で、朝から晩まで少しの暇もなく働いている川尻をよく覚えていた。—「少ない食費の枠内で、育ち盛りの学生に少しでも栄養のあるものを求めて先生自ら買い出しに出られることの多い日常にもかかわらず、早朝でも夜遅くでもきちんとした着物姿で白い割烹着をかけておられました。先生はいったいいつ寝られるのだらうと、私たちは囁きあったものです」(1959卒)。

学生たちの体調はどうか、お腹は空いてないか、帰省するのにお金はあるか、帰省できない者は淋しがってはいないかなど、一人一人に対する川尻の分け隔てのない優しい配慮はまっすぐに寮生たちの心に届いた。それは何十年経っても忘れられず、感謝の思いはいよいよ深まる

一方のようである。――「卒業後数十年が経過した現在も心に残っているのは、風邪のひきかけの時、川尻先生のところへ行って喉に薬を塗ってもらったことです。ほんとうに温かい雰囲気でした。それともうひとつ、1年生の夏休みに帰郷する時、玄関まで川尻先生が見送って下さり、〈お金あるの?〉と心配して下さったことです。いつも出歩いてばかりいた私のことを心配して下さったのでした。白いエプロン姿で低い声でやさしく言って下さった御様子が今でもありありと目の前に浮かびます。じつはその頃は私の父の病気が重く、父は結局その夏に亡くなってしまったのですが、先生もそれをよく御存じでしたのでとくに心配して下さったのでした。九州の大学病院まで危篤の父を見舞って下さったことも忘れられません」(1961卒)。

――「寮監の川尻先生は、本当にお母さんのような心配りをされていて下さったのだと、後になっていっそう強く思います。試験後の休みなどには、実家が遠くて帰省できない寮生を山梨県の昇仙峡へ連れて行って下さいました。先生ご自身は一日として休日のない日々を過ごしておられたのにと、いまさらのように思います」(1955卒)。

川尻は家政科の調理実習を控えている学生には寮の厨房でオムレツを作らせてその日の夕食の献立に組み入れたり、クラブ活動で遅く帰ってくる学生には夕食のお汁を温めて出してやり、東京でしか体験できないことをさせようと、歌舞伎見学や一流ホテルでの西洋料理のマナー講習会を企画した。川尻のそうした姿勢を学生たちは自分たちのためを思っただけの教育的配慮であるときちんと理解していた。またそれだけの信頼を川尻は得ていた。一人のキリスト教信者として川尻は、日々、神に喜ばれる働きをしようと努力していたが、それは具体的には自分に託された約70名の女子学生を、母親が娘に対するように世話することであった。その姿勢が明瞭に寮生たちの前に示され、彼らは素直に感銘を受けたのだと思われる。

川尻は学生の「規則破り」や「嘘」にも動じることなく、広い視野をもって学生の成長を見守り、すぐに学生を咎めたり、叱ったりするようなことはなかった。そうした大きな包容力を当時から感じていたという寮生もいれば、いま振り返ってみてそのことに気づいたという寮生もいる。――「先生は、たとえば私たちが教会の礼拝に行かず、その時間をデパート巡りに費やそうとも決してお叱りにならず、深い祈りの中で私たちを待っていてくださいました。そうしますと私たちも先生の信頼にお応えしなくてはという気持ちが湧いてきて、二度とそのようなまねはしなくなりました」(1959卒)。――「寮ではそれほどの優等生ではなかった私は先生の目を盗んでは闇(やみ)鍋をしたり、教会にもあまり行かず、〈銀座教会へ行きます〉と称して銀座を決め込んだりしておりました。もしかしたら先生にはすべてお見通しだったのかもしれませんが」(1953卒)。

若い学生たちにもこうした人格の大きさや深さは伝わるものである。つぎに引く文章も同じく川尻の人格の一つの側面をとらえている。川尻が英語やピアノができることを人前では語らず、ほかの面でも自己の功績を誇らない謙虚な人であることに気づき、深い尊敬の念を覚えたという趣旨のものである。――「川尻先生は英語もお出来になる。宣教師さんが嬉しそうに帰って行かれたよ、と囁きあいました。ところが川尻先生は、〈いいえ、英語はちっともわかりませんよ〉と、すましておられます。後日東洋英和の青楓寮の卒業生の方から、川尻先生にピアノを

おねだりして、いろいろ弾いていただいたというお話をうかがいました。ベートーベンの〈月光の曲〉もお得意の曲の一つだったそうです。私たちは先生の特技を知る由もありませんでした」(1955卒)。

同じ寮生は、「寮監の川尻知恵先生は、〈イエス様はこうおっしゃっていますよ〉とか、〈聖書にこう書いてありますよ〉ということはほとんどおっしゃらなかったように思います。それなのに私たちは不思議な感化を先生から受けて、毎年寮生の中から何人もの受洗者が出ました」と書いている(1955卒)。これらの感想は、学生が感銘を受けたのは川尻の言葉からではなく、人格からであったことを示している。

川尻の寮運営の仕方は理屈で考え出されたものでも、揶揄ものでもなかった。それが表面を取り繕っただけのものであったなら、朝から晩まで同じ場所で生活する、若くて鋭敏な感受性を持った多くの学生たちからこれほどの尊敬を得ることは難しかったはずである。ある意味では川尻であるからこそできた寮運営であった。しかし同時に上に引いた数々の回想は、そもそも寮とは言葉によってではなく、ある人格の存在によって教育がなされていく場であるということを示唆している。家庭で行われる教育については俗に「子は親の言うことを聞いてではなく、親の背中を見て育つ」と言われるが、寮のもつ「教育」機能もそれに似た側面がある。シオン寮を「教育」寮であるというとき、その「教育」の意味は一般に学校の授業を通して行なわれている教育とは異なった性格のものであることを意識しておくべきであろう。

川尻知恵以外の寮監について卒寮生たちが記した感想文を読んでもと、寮生たちの心に刻み込まれ、いまでも忘れられない寮監の姿はいつも家庭の中心的な母親のようなものであった。川尻と平行してシオン第二寮の寮監をつとめ、引き続き猿楽町時代の寮監になった飯久保澄についても、あるいは猿楽町に移ったシオン寮で1985年から1997年までの12年間寮監をつとめた平田絢子についてもそうである。寮生の胸に親愛と尊敬の念を深く刻印したのは寮監が口で言ったことではなく、その姿、日常の姿勢、自分を案じてくれる心遣いであった。

飯久保澄についてある寮生はつぎのように書いている。 —「寮には私たちの私淑する飯久保澄先生がおられました。すらりとした和服姿に白い割烹着がよくお似合の若いお母様先生でした。いつもにこにことして、涼やかなお声で私達の心を元氣付けて下さるのでした。〈お早う、嬉しそうね〉との言葉で、一日良いことが起きそうな気持ちになるくらい幸せでした。寮監としての先生のお仕事の大変さなど想像もせず、卒業してからも、嬉しいとき、困ったとき、思い余ったときなど、子供連れでお邪魔しては、帰る時は足取りも軽く帰ったものです。何と先生に頼りきっておりましたことでしょうか。感謝あるのみです。凜とした中にも温かな先生の心に全てを包まれて、愛を共有する友人たちと過した寮は私の青春そのものです」(1958卒)。

平田絢子についても次のような文章がある。 —「そうして(門限に遅れないように)全力で門を駆け抜けると、きまって私の目に飛び込んできたのが心配そうに手を胸に当てて玄関に立っていらっしゃる寮監の平田先生のお姿でした。先生、今日もごめんさい、といつも心の中で手を合わせ、お詫びをしていました。私のシオン寮の思い出は、平田絢子先生そのもの、

と言いきってしまってもいいくらいです。私は平田先生にはご心配をおかけしてばかりおりました。それなのに先生からは折りにふれ、さまざまなものをさまざまな形で与えて頂いていたような気がしてならないのです。上手に言えないのですが、目に見える形ではなくてもいつもこちらが必要としている時に必要としているものを与えて下さっている、そう感じていました。娘を授かって、遅れ馳せながらそれがようやく分かってきたような気がしています。先生の寮生に対する愛情は母親の愛情そのものだったのですね。いつも私たち寮生を信じて、そして見守ってくださり、ありがとうございました」(1990卒)。

3. 寮で得られた友人

寮における友人関係の重要性を卒寮生の文章に見出すであろうとはある程度予想のつくことではある。じっさい、66編ある感想文のほぼすべてがそのことを綴っていた。しかも世代の違いにもかかわらず内容がほぼ重なっている点が興味深い。数多くある同趣旨の感想文のなかに繰り返しでてくるのが「私の宝もの」「一生の宝」「何よりの宝」といった言い回しである。そのこと自体、寮という生活のなかで最も親密な友人関係が生れるということの普遍性を示しているといえる。

まずはシオン第一寮が開設された年に1年生として入寮した人の文章を紹介しよう。彼女が卒寮したのは48年前であった。――「シオン寮の生活で良かった最大のことは友人に恵まれたことです。今でもなお、どの方々も私にはなくてはならない友人です。当時1年上の先輩はちょっと怖い存在でしたが、何年かしてお会いした時は優しい方でした。当時の同寮生とは家が近いということもありますが、今後とも一生の友人として交わりを続けてゆくことと思います。離れて住む友人たちとも会えば気分はすぐに寮生活時代に戻ります」(1953卒)。

次に示すのはその先輩とは44歳もの年齢の開きのある、5年前に卒寮したばかりの若い卒寮生の書いた文章である。――「シオン寮は私に大きくて大切な宝物をくれました。それは生涯の友である寮の友人たちでした。とくに友人たちとは寝食を共にし、一緒にお風呂に入り、時には消灯時間が過ぎてからもベッドライトにタオルを掛けて声をひそめながら、楽しいこと、嬉しいこと、悲しいこと、辛いことなどを語り合いました。卒業して6年近くの歳月が経ち、今はみなそれぞれの道を歩んでいます。仕事をしている人、結婚した人、お母さんになった人、勉強を続けている人などさまざまです。それでも会えばすぐに当時の自分たちに戻れます。それどころか当時よりもさらに強い絆で結ばれているようにも思います。共に喜び、悩み、一緒に涙しあった仲間だからなのでしょう。これからもずっと宝物であり続けることでしょう」(1997卒)。

寮の友人は短大のクラスの友人に比べていっそう密度が濃く、ほとんど家族同然だと多くの人が感じている。――「寮生と家族と似ているのは、しばらく会わずにいても、10年もブランクがあっても、再会するとごく自然に話し始められる点でしょう。昨日まで一緒に居たような錯覚を覚えるほどの安心感、久しぶりに帰った我が家で、何事もなかったかのように会話が

始められる、あの感じと同じなのです」。彼女は続けてその理由をいとも易々と説明するが蓋し至言である。 —「たしかに生活を共にすると恰好をつけてばかりはいられないものです。寝起きの素っぴん顔はもとより、寝言や鼾も聞かれるし、つい不機嫌な顔をしてしまうこともあります。喜怒哀楽をいちいち隠してはいられません。それまでは親兄弟だけにしか見せずに来たものを、ありのまま曝さなければならないのです。存在が近くなるのは当然といえば当然なのでしょう」(1987卒)。

人を知り、翻って自分を省みるという基本的なことの繰り返しが寮の生活である。実に世の中の人はさまざまだという認識に始まり、あのような人になりたいと思う「モデル」がみつかったり、ああはなりたくないという「反面教師」にぶつかったりする。 —「シオン寮での生活を通じて私が学んだもの、それはなんといってもたくさんの人と知り合って言葉を交わしたことです。考え方の違いから、小さな諍いと仲直りを繰り返しつつ、人間関係を構築してきましたが、それがその後の人生に大変役に立ったと思います。自分を抑えることも知りましたし、こんなユニークな人がいるのかと驚いたり、あんな先輩になりたいと憧れたりしました。世の中いろんな人がいるんだなあ、という当たり前のことを初めて理解できた場がシオン寮でした」(1980卒)。

そしてよき友人に出会い、親しくなった場合にはそこから受けるものは限りなく大きく、また深い。表面的には単に知識を吸収しているようにみえるときにも、実は受けているのは人格的影響である。そしてすぐれた人格に感化されることによりいつのまにかより強く、より包容力のある、より多くの喜びを日々の生活の中に見出すことのできる人間に育っていく。そういう経験が次にあげる数種の文章の中には語られている。 —「ルーム・メイトから受けた恩恵はそれこそ青春の宝物でした。教えられて出会った本、先輩の出身地から毎月送られてくる同人誌など、未知の世界が六畳間から広がっていくのでした。ルーム・メイトと一緒に観た『アラビアのロレンス』も、『サウンド・オブ・ミュージック』も懐かしい映画です」(1966卒)。

—「卒寮して20年を経た現在も、良き先輩方に恵まれた幸せを感じております。私の寮生活は下宿や自宅通学では得られない、学年、学科を超えた出逢いに恵まれた、とても素敵なものでした。大人になった今でも大人の目で絵本を楽しんでおりますが、それも同室だった児童教育学科の先輩の影響です。寮時代に触れた多くの寮生たちのさまざまな個性は、自分が持っていないものを知る貴重な体験でした」(1981卒)。 —「人はどのような人と出会うかによって変化していくものです。シオン寮には、くあの時あそこであなたに逢えてよかった、そう思って感謝のできる女性を一人でも多く世の中に送り出し続けるような寮であってほしいと思います」(1980卒)。 —「どうしてこんなにうまく暮らせるのだろう、どうしてこんなに次々によい友人ができるのだろう、そう考えた時、私はくあ、シオン寮！>と思いました。私達は2年間の寮生活で、北海道、東北、関西、九州の言葉と、全国のお国言葉を朝な夕な耳にしながら暮らしていました。寝起きを共にすることによって知らないうちに友人を通して、その地方の暮らしぶりをどこかで心にとめていたのだと思います。さらに自分でも気がつかないうちにどんな場面に出会っても違和感を抱かない心構えまで寮生活の中から身につけていたように思います。

寮生活の日々の尊い体験が卒寮して20年も経っていましたが、今の生活に生かされていることにその時気づきました」(1964卒)。

自分の出会った寮での良い友人への親近感は、会ったこともない寮の先輩や後輩にまで広がっていく。そのことを語るのが次の文章である。 —「私は昨年秋まで4年間シオン寮の会の役員をひきうけ、最後の2年間は会長としてお手伝いさせていただきました。ちょうど10年ぶりにシオン寮同窓会名簿を発行したところで名簿発行に際しての同窓生への確認、問い合わせ、そして私達の作業ミスでご迷惑をおかけしてしまった方々へ電話でお詫びを伝えるお役を私がいたしました。お顔もわからない方々なのに私が、〈シオン寮の会の者ですが〉とひとこと言っただけで、電話の向こうの方の顔の動きが想像できるほど、突然お声がパッと変わります。もうここで、〈貴女と私はお友達ね〉という糸のつながりを感じてしまいました。お詫びを申し上げる電話なのに、どの方も優しく丁寧に、〈お手数おかけしましたね〉、〈会のお手伝いご苦労さまです〉、〈役員の皆様によろしくお伝え下さい〉、〈いつか上京してシオン寮の辺りを歩いてみたいのですよ〉などと、ねぎらいと励ましの温かいメッセージを沢山下さり、私は恐縮するばかりでした。気持ちのよい電話のやりとりを終えて受話器を置いたあとで私はしみじみと思いました。こういう方々を育てて下さったのがシオン寮なのだ、と」(1964卒)。

どんな時代になっても人と人のつながりがいちばん大事であるということは、口で言うのは容易だが、実感できるというのは貴重な体験にちがいない。多くの寮生はシオン寮の生活のなかでそれを得ることができたのだ。この項の最後に二つの文章を紹介しておきたい。 —「今私は広島で中学校の教員をしており、さまざまな価値観が混在する中で、ある一つのことに力を結集することの難しさを痛感しています。でも時代はどう流れようとも、やはり人と人とのつながりを大切にしていくことによって私たちは心に宝を持つことができるのではないのでしょうか。シオン寮は友人と心の通い合う喜びを感じさせてくれた、私にとっての第二の〈我が家〉でした」(1992卒)。 —「寮の先生方には申し訳なかったのですが、あの頃の私たちは話しても話しても話し足りなくて、毎晩のように誰かの部屋や共同の場所に集まって、時には消灯時間を過ぎて夜遅くまで、他愛も無いことから、人生とは何ぞや、などということまで、よくも話が続くものだ自分たちでも可笑しくなるくらいしゃべり続けていました。寮生活でまっさきに思い出されるのはそのことです。そして話すたびに、〈自分が伸びてゆく〉と感じていました。また、人と触れ合うことによって思いやることを知るといふ、人生で最も大事なことを学びつつあったような気がします」(1993卒)。

4. 寮規則という制約について

寮という集団生活のなかに規則という形で制約があることを卒寮生たちはどのように受け留めていたか、またそれにどのような意味づけを施していたかということはこの項で明らかにしてみたい。感想文からは当時どう思っていたか、そして今振り返ってみてどう思うかという二つのレベルの思いを読むことができる。たしかに初期の頃の寮生のほうが規則や諸制約への反

発が少ないようである。昭和20年代、30年代当時の社会や各人の家庭など周囲も大体そのようなものだったから、心理的抵抗は少なかったであろう。 —「寮の設備は、戦後の混乱から立ち直りかけた時代のことでですから現在とは格段に相違のあることは当然です。でも当時としては私も友人もみな、新築で明るくて設備も上々の素晴らしい住まいだと受けとめていたように思います。規則もそれほど窮屈だとは思いませんでした」(1953卒)。 —「風土の異なる全国から集まった寮生達は、八畳の部屋に4名で入り、生活を共にしました。時には火鉢を囲んですき焼きということもありました。門限6時の決まりをはじめ、礼拝、食事、入浴、消燈に関する規則など、厳しいものでしたが、寮生の素直な気持はそれらを不自由とは思いませんでした」(1958卒)。

だがいかに初期の寮生とはいえ規則に縛られる生活に対する反発がなかったわけではなく、寮生活の質素さや窮屈さに外部の人からの同情が寄せられていなかったわけでもなかった。 —「自由が丘のお友達のお家にお邪魔したこともありました。その時お友達の父上(当時大会社の重役をしておられました)が、〈寮では大変でしょう。うまいものを腹いっぱい食べて、ゆっくりして帰りなさい〉とおっしゃってくださったことが今でも強い印象として残っています」(1952卒)。 —「私にとって学生時代の2年間の寮生活は(中略)ただひたすら寮の規則に反発する毎日でしたが、それはそれで結構楽しめました。規則への抵抗といっても食事をパスするとか、夜お出掛けするとか、門限に遅れて帰るとか、今考えればどうということのないものばかりでしたが、当時としてはささやかながらも精一杯の抵抗でしたでしょうか」(1961卒)。 —「すでに銀行員になっていた次兄から、寮生活はどんな風かと聞かれました。私は朝食前のお祈り、夕食後の礼拝、帰寮の門限、消燈時間、日曜日にはよほどのことがないかぎり学院の教会へ出席していることなどを話したと思います。兄は〈まるで修道院の中にいるようだね〉と言いました」(1964卒)。

しかし寮生たちはそういう周囲の見方や自分の当初の反発にもかかわらず、寮という場においては種々の制約は合理的でもあり、必要でもあり、自分にとって役に立つ能力を与えてくれたと受けとめている。当時からそれを理解していた者もいたし、あとになって分かったと書く者もいる。 —「設備は現在から考えると質素なものでした。例えばお風呂も大勢で入るものでしたし、お部屋も八畳間に4人などでしたが、不満に思ったことはまったくなく、楽しく過ごせました。共同生活の中でのお掃除の分担や消燈・門限などを守るうちに知らず知らず色々なことを教えていただきました」(1957卒)。 —「寮の中庭の草取り、自分達の家をピカピカにするための床のワックスかけやガラス磨きにも励みました。寮生全員の食器は二部屋8人が順に当番で洗うものと決まっていました。こうして経験した共同生活がその後嫁してからの暮らしにどんなに役に立ったことでしょう」(1958卒)。 —「起床後身支度を整えての朝食は朝の祈りから始まりました。食後には当番からその日の清掃場所が伝えられ、登校前の一時、一斉に寮全体のお掃除に励みます。夕食後には賄いをしてくださっていたIさんたちに交じって、その日あったことなど無邪気にお喋りしながらお皿洗いなど、全部自分たちでしました。今、考えてみますとこの、自分たちの生活の場は自分たちの手で責任を持って美しく保つというごく当

然の素朴な行為が、実は大変な重要性を含んでいて、健全な家庭あるいは社会を築いていく上での礎のようなものであったことに気づきます。集団生活の中での規律や忍耐力なども私たち寮生はこの寮での生活の中で学んだのでした」(1959卒)。

しかも興味深いのは、制約に不満を感じた当時の自分の視野はまだ狭く自己中心的であったこと、自分の成長によって規則の意義は理解できるようになったこと、決められたことを守っていくことは社会生活上不可欠であること、ある許された範囲の中での工夫が自分の力を伸ばしていくことなど、規則をめぐる前向きの受けとめ方は、若い世代のほうにいつそうはつきりと見られることである。自由への欲求と、それを阻むかに見える諸規則との葛藤をより鮮明に意識した世代だからこそその反応であると思われる。いいかえれば、規則の制約をうるさく思い、強く反発をするほうが、むしろその意義を深く理解するというたのもし「逆説」が見られる。――「在寮中は門限や外泊届け、木曜の礼拝、朝の掃除義務などの規則が厳しくて不便だと思ったこともありましたが、今思えばあれで良かったと思います。しっかりしたモラルが自分の中にできるまでは、ある程度の規則の中で生活しないと生活習慣が身につきません。便利さを追求するならマンションに一人暮らしをすればよいでしょう。不便さの中でこそ知恵を学ぶことができます。私の場合は寮で他人と関わり合いながら暮らす中で、コミュニケーション能力を高めることができたように思います」(1989卒)。――「生まれた環境も育った場所も違う多感な年頃の少女達が短大に入学し、都会に溢れる情報の波と格闘する同志となり、試行錯誤を繰り返しながらその処理能力を築き上げていくときに生活を共にした場所がシオン寮でした。そこは周囲との協調と個性の確立という、相反する目標を同時に実現していかなければならない場であり、思えば容易なことではなかったように思います。しかし肉親と離れて取り組む初の他者との共同生活が、それまで勉強一本槍で凝り固まっていた頭に、生きていく知恵を授けてくれたのではないのでしょうか」(1992卒)。――「門限は平日は9時、土日は10時半で、お風呂は9時までという規則でした。私たちは<窮屈だ>と愚痴をこぼしながらも素直にそれを守っていました。今考えると、そうした決まりは集団生活をする上でとても大切なことであり、それ以上に私たちが寮での時間を最大限に充実させていくために必要なことであったと気づかされます。毎晩のようにどこかの部屋に集合し、時にはテレビ室や図書室にも侵入しては、太ることなど気にもしないで旺盛な食欲と、とめどもない話で盛り上がりました。このような時間が仲間とのつながりを深める上でとても大切だったのです」(1992卒)。――「寮のなかで芸術学科の学生は私だけでしたので、デッサンをするにも、油絵具を広げるのも寮は少々不便でした。でも作品は仕上げなければならないので、学校で門限ぎりぎりまで一生懸命やって、寮まで飛んで帰るというような日々でした。絵具や粘土で汚れた手で寮の夕食を食べ、お風呂に入るとまた元気になれたものです。夜は部屋に友達が集まり、毎夜お菓子を食べては喋って過ごしましたが、英文学科の学生が夜の9時40分頃、NHKのラジオ英会話を聞くためにさっと部屋に戻る様子は見事でした。社会人になった彼女達が英語を使って活躍している姿を見ると、あの寮での日々が今の私達を作っているのだとつくづく思います」(1996卒)。

5. 寮におけるキリスト教教育

シオン寮設置時からあって、現在もずっと続いている一つの重要な理念は、この寮が学生にキリスト教的な生活環境を提供するというものである。その目的のためにシオン寮では日常の行事として次のようなことを実施し、全員の出席を求めてきた。毎日の朝食前の朝拝、毎週一回の夕食後の夕拝、日曜日午前中の近隣教会への出席の奨励、イースターやクリスマスなど折々のキリスト教行事だけでなく、新入生歓迎会や卒業生送別会など、それ以外の行事もすべて讃美歌と聖書朗読と祈禱をとまなうキリスト教の礼拝の形式で行なわれるということである。青山学院はアメリカのメソジスト教会の支援によって設立された学校であり、その後も一貫してキリスト教の精神に基づく教育を行なっているが、そのことをシオン寮に入寮してくる学生が全員熟知しているわけではない。先にあげた決まり、すなわちキリスト教関係の日課や行事への参加の義務についても入寮手続きの段階で説明を受けているはずであるが、必ずしも明確に意識されているとはかぎらない。それらのことをよく承知しており、さらにそれまでにすでにキリスト教との何らかのつながりを持っている寮生の割合はむしろきわめて少ないというべきで、大部分の寮生にとってはキリスト教的生活は初めて経験するものである。しかし寮生の感想を見ると、そうした日課や行事のなかで大切なものを得たと記しているものが多い。

次に紹介する文章には、寮時代のキリスト教との出会いにより信仰に導かれて受洗、その後教会生活を送るようになったということが書かれている。単に日課や行事だけでなく、キリスト教の信仰を体現し実践している教師や寮監との出会いも重要な意味をもっていた。しかしやはり日常のキリスト教的な生活習慣が大きな影響を与えたことは明らかである。 —「朝食時は当番の学生が食前の祈りをしました。学校では2時限と3時限の間にP.S.講堂で全校礼拝が毎日行なわれました。この時間帯に寮に在るとうしろめたさを感じるような空気でした。そして寮での夕食の後は夕拝がもたれ、向坊長英先生や幸田三郎先生からお話をうかがったものです。クリスマスや新入生の歓迎、卒業生の送別会など、特別の行事には短大から先生方がおいで下さり、礼拝がありました。…日曜日にはそれぞれ自分で希望した教会に出席することになっており、寮に残っていることはできませんでした。私は友人と経堂教会に出席していましたが、私が求めていた〈何か〉は、シオン寮の生活の中で少しずつ形作られていったように思います。P.S.講堂での礼拝と日曜日の礼拝を休むことはありませんでした。当時はまだ聖書を通読したこともなく、教義も理解出来ませんでした。川尻先生が存在によって〈キリストを知る知識の香り〉を感じました。このように川尻先生によって信仰を育てられて、次第に先生と同じ信仰の恵みにあずかりたい、キリスト教を信じてゆきたいという気持ちが強くなってまいりました。宗教部の西島正先生や友達の力添えもあり、1953年12月20日に経堂教会の高橋豊吉牧師により洗礼を受けさせて頂きました」(1954年卒)。

また次の二つの文章も、シオン寮で知ったキリスト教が自分の価値観の基準となるに至ったということを語っている。 —「心のこもった夕食の後、一日の疲れもほぐれた頃、夕べの礼拝の時間となります。川尻先生の奏でられるオルガンが礼拝堂一杯に響き渡って礼拝は始まる

のですが、その美しく力強い響きの中には大きな情熱が漲り、護られている自分を全身で感じたものです。毎夕の静かなひとときに美しい讃美歌を歌い、祈ることを学び、故郷の両親に想いを馳せて感謝の気持ちに浸りました。あれから今日までの40余年、悲しい時、苦しい時、讃美歌を口ずさむことによってどれだけ慰められ励まされたことでしょうか。そして「神様のみ心のままに」と祈りに祈って、幾度心の平安を取り戻したことでしょうか」(1959年卒)。 —「寮生活を送ったことによって得たものは何であったのか、それを知ろうと思い、消去法でたどってみました。最後に「礼拝」が消されぬままそこにありました。…学生生活を送るうちに授業や宗教講演や寮の朝夕の礼拝を通じて、いつしか神に向き合おうとする芽は私の中に育っていたのです。20歳代の時、ある決断を迫られ、悩みに悩み抜いたことがあります。そのとき、ふと「イエス様ならどうおっしゃるだろうか」という思いが浮かび、聖句が次々に蘇ってくるという経験をしました。これは自分にとっても驚きでした。長い人生の中では色々なことが起こり得ます。私の場合も短大卒業後40年の生活は平坦なものではありませんでしたし、現在も深く大きな悩みを抱えつつ日々送っている者ではありますが、考える尺度と基準をキリスト教の中に見出したことは大変な幸せであったと思います」(1962年卒)。

しかし定例の教会出席や受洗には至らず、自分がクリスチャンであるとは今でも思っていないが、シオン寮での経験からキリスト教に親近感を覚え、人生の節目ごとにキリスト教に指針や支えを見出してきたという類いの感想が極めて多いことにも注目したいと思う。きわめて若い世代の中にも、寮の生活のなかでごく自然にキリスト教にふれられたことがよかったと感じている寮生は多い。 —「考えてみますとクリスチャンでもない私が、毎日朝早くから礼拝をし、讃美歌を歌い、木曜日には帰寮後就寝までほとんどの時間を夕拝にとられてしまうとは思えないことかもしれません。でも私はシオン寮での朝夕の礼拝や、週に一度の夕拝をそれほど苦痛には感じませんでした。むしろあたりまえのように毎日の日課として行なっていたように思います。大切な時間をこんなにも制限されていることを、寮生以外の友人に話すと、〈なぜ〉〈どうして〉と尋ねられたこともありました。でも本来人間とは弱い存在で、何かに頼っていなければ生きてはいけないものだと思います。まして18歳くらいで、初めて家族と離れて一人で東京で新しい生活を始めたわけですから、たとえ母のような寮監や、姉妹のような先輩や後輩がいたとしても、それはどこか不安で、孤独で、心細かったのだと思います。だから私はあの毎日のお祈りを自然と受け入れられたのだと思います。何を心のよりどころとして良いのかわからなかった時、いつもそばに聖書と讃美歌があり、私たちを教えてくれ、導いてくれました。時が流れても人の心は変わらないはずです」(1988年卒)。 —「卒寮して5年が経つというのにどうしてこんなにシオン寮を好きなのか、自分でもおかしくて笑ってしまうほどです。決して模範的な寮生ではなかったのに。入寮式の時、私は聖歌隊の讃美歌や、聖書朗読、お祈りに、〈なんだ、気持ち悪い〉と、ひどく違和感を覚えました。同じ新入生でもミッションスクールから来た人は皆、讃美歌を歌い、聖書を開くのにも私のようにおどおどせず、さっとそのページを開けて、一緒に朗読していました。そんな私が1年後には、戸惑っている後輩の様子に黙っていられず、〈××ページよ〉と教えてあげていました。キリスト教は私の生活の一部に

なったのです。芸術学科の学生だった私は、絵画に描かれるキリストやマリア像、聖書の場面をより深く理解できるようになりました。それがもっとも意義深いことだったと思います。絵画を鑑賞するのに聖書を一生懸命読みました。そしてそれは卒業した今も変わりません」(1996年卒)。

6. シオン寮における教育の今後の課題

本稿が試みたのは、シオン寮開寮当時から目標として掲げられていた「人格教育」と「キリスト教教育」がどのような成果をもたらしたかを、元寮生が往時をふりかえり、かつそのことを現時点でどう思っているかという面から探ることであった。資料として用いた66編の文章はいずれもシオン寮における体験を積極的に評価するものであった。

寮監についての寮生が記した感想からうかがわれたことは、ある一人の若い人間の人格がつくられていく過程で必須不可欠なものは、それに向き合うもう一つの大人の人格の存在だということではないだろうか。いいかえれば寮監(副寮監も含まれる)に、ある確固たる人格が求められるのである。それは聖人や聖女でなければ寮監の資格がないという意味ではない。しかし若い人々を愛し、彼らの世話をすることが自分の務めであると自覚し、つねにできる限りの誠意をもって裏表なく彼らに接していくような人がそこにいなければならない。そういう人格の存在抜き場所では人格教育は行われ得ないということを、寮生の記す数々の文章は示唆していると思われる。

寮の友人関係に関して書かれた文章類からは、成長期にある若い女性にとって素顔のままで向かい合うことのできる、あたかも姉妹のような同年輩の相手の存在がいかに重要であることがあらためて確認されたと思う。人間存在はジョン・ダンの「No man is an island」(人間は離れ小島とは違う)という句が巧みに表現しているとおり、まわりから完全に切り離されたものであってはならない。人とのつながりを意識し、また関係を結ぶことのできる人間になるためには、自分自身について、他者について、また人間一般についての理解を欠かすことができない。寮はそれをせざるを得ない環境を提供するのである。その意義は今後重要性を増しこそすれ、減少していくことはないであろう。

寮の規則や集団生活上の種々の制約についても、ある程度のルールは社会において必要であること、それらには合理的な根拠があること、それらに抵抗したり、時には破ったりするのも成長には有意義である、といった寮生たちの解釈は的確である。日々の寮運営でもっとも摩擦の多いのが規則をめぐるものであるが、この本質を理解して、ある筋を貫くことが寮監には求められるであろう。

キリスト教の日課や行事については近年とみに寮生の関心が薄れてきているといわれる。社会全般の流れもそれをうかがわせる。その中であって青山学院としてはどのような姿勢をとるべきであろうか。学校の建学の精神、そして教育方針が明白に述べていることを心から「然り」と受け入れるならば、覚悟をきめてその実現に取り組んでいかねばならないであろう。そして

本稿でもみてきたような寮生による評価は、そうした営みが充分希望に満ちたものであることを示唆しているように思われる。

注

- 1) その後の学則改正を経て現在の学則は第63条で学生寮についてつぎのように定めている。文言は少し変更されているが趣旨は同じである。「(学生寮)第63条 本学に学生寮を置く。2 学生寮は、キリスト教の精神に基づいた共同生活を通して、寮生の人格の育成と学生生活の充実を図ることを目的とする」
- 2) 「シオン寮だより」No.4(1993年11月)。青山学院女子短期大学シオン寮の会の発行するニュースレター。
- 3) 呼びかけの対象とした卒寮生の範囲は1951年に入寮、52年卒寮の最初の寮生から1997年に卒寮した寮生までとした。1997年を下限としたのは寮体験から調査時点までの間にある程度の年数が経過していることが望ましかったからである。
- 4) 以下本稿で引用する寮生の言葉はすべてこの文集による。
- 5) シオン寮の寮監というのは青山学院女子短期大学の職員ではあるが、寮に寝泊りし、常時学生に付き添っていなければならないという点で勤務形態は一般の事務職員とは大きく異なっている。1951(昭和26)年に発足したシオン第一寮では1966年の猿楽町への移転まで15年の間川尻知恵(かわじり・ちえ、1900—1978)が寮監を務めた。1954(昭和29)年発足のシオン第二寮では寮監は飯久保澄(いいくぼ・すみ、1911—1995)で、飯久保は第二寮の寮監としては12年、さらに1966(昭和41)年猿楽町にそれまでの第一、第二の寮が合同移転したあとの新しいシオン寮の寮監として1978(昭和53)年までの12年、合計24年にわたって勤務した。同年から1985(昭和60)年までの8年間の寮監は大林清子(1928—)、同年から1997(平成9)年までの12年間の寮監は平田絢子(1932—)であった。同年以降現在までは中村千恵が寮監を務めている。
- 6) 川尻知恵は札幌生れで、父は牧師。広島女学院、神戸女学院で学び、青山学院中等部部長で、牧師でもあった川尻正脩と結婚し三人の子供を育てた。夫に死別後は青山学院女子神学部、女子専門部(いずれも青山学院女子短期大学の前身)の寮の寮監になり、寮生の訓育に当たっていた。『川尻知恵先生追悼文集』(青山学院女子短期大学シオン第一寮同窓会編、昭和54年)がある。